

## 八重山語・宮良言葉：記述文法と学習資料に向けた形容詞の記述

クリストファー デイビス  
Christopher Davis

## 1 概要

本報告書では、八重山語・宮良言葉の記述と継承に向けた資料として協力者に訳してもらった「大きなかぶ」の書き起こしを紹介し、その一部で使われる形容詞表現に焦点を当て、宮良言葉における形容詞の特徴を記述する。

宮良言葉の「形容詞語幹」として分析するものは、主に以下の三つの方法で使われることがある：

1. 形容詞語根が名詞の直前につけることによって、複合名詞を作る方法
2. 形容詞語根に接尾辞 *-ha* が付き、ハ形容詞として活用する方法
3. 形容詞語根が重複して、重複形に *-i* が付き、重複形容詞として活用する方法

これらの方法による形を、それぞれ「複合形容詞・ハ形容詞・重複形容詞」と呼び、形容詞語幹「グマ」*guma*（小さい）を例に示す：

複合形	ハ形	重複形
グマフツィ	グマハーン	グマーグマイ
<i>guma+fucī</i>	<i>guma-haa-n</i>	<i>gumaa-guma-i</i>
小さい+口	小さい-ADJ-PRS. IND	小さい-RED-ADJ
口の小さな人	小さい	小さい

複合形容詞とは、形容詞語幹が名詞に直接に付き、一種の「複合語」をなす形で現れるものである。ここでは、形容詞語幹「グマ」*guma* が、「フツィ」*fucī*（口）という名詞に直接に付くことによって「グマフツィ」*guma+fucī* という複合形ができる。複合形容詞の一つの特徴として、「非構成的」であることを指摘する。要するに、形容詞語幹と名詞語幹による複合語は、その要素からだけでは予測できない意味をなすことがある。例えば、上の「グマフツィ」*guma+fucī* は、「小さな口」という意味ではなく、「小さな口を持っている人」という意味になるようである。

形容詞語幹に接尾辞「ハ」*-ha*（または「ハー」*-haa*）をつけることによって、ハ形容詞が派生される。ここでは、ハ形容詞に接尾辞「ン」*-n* をつけることによって、典型的に「（現在）終止形」と呼ばれる形になっている。この形は、辞書などでは原型として扱われるこ

とが多い。修飾語として使われるときは、接尾辞「ン」-nの代わりに「ル」-ruをつけなければならない。例えば、「小さい人」は「グマハール プイトウ」guma-haa-ru pitu となる。複合形と比べると、ハ形容詞が名詞に修飾するときの句の意味は構成的である。例えば、「グマハール フツィ」guma-haa-ru fuci はそのまま「小さい口」という意味になる。

最後に、重複形は、形容詞語幹を繰り返して、その後ろに接尾辞「イ」-iをつけることによって派生される形をとる。重複される語幹の一回目のものは、最後の母音が伸ばされて、長母音として発音される。例えば、上の「グマ」の重複形「グマーグマイ」gumaa-guma-iを作るには、「グマ」gumaを繰り返し、一回目のものを「グマー」gumaaと伸ばし、二回目のものに「イ」-iをつけて派生される。また、ハ形容詞と同じく、重複形容詞を修飾語として使われる場合は「イ」-iの後ろに接尾辞「ル」-ruが付く。

形容詞の語幹の中に、どの形でも現れるものと、一部の形だけで現れるものがある。ハ形容詞では、母音調和が起るため、語幹に付く「ハ」は、語幹の最後の母音によって「へ」や「ホ」として現れる。以下で記述する「くいんくいいる」kin-ki-i-ru (黄色い) 以外は、これまでの調査ではどの形容詞の語幹もハ形容詞として使われることがあるが、重複形容詞として使えるものは限られているようである。そして、重複形容詞として使われる場合、予測しにくい音韻変化も観察される。以下で、これらの形の特徴を簡単に述べる。

## 2 「大きな大根」における形容詞表現

以上で紹介したハ形容詞と重複形容詞の詳しい記述に入る前に、本調査で録音した「大きな大根<sup>1</sup>」の一部の書き起こしにおける形容詞表現を紹介する。形容詞表現は、下線が引かれた太文字で表記した。

かっだがな一ぬ	<u>まぎ</u> だいくに
kaddaganaa=nu	<u>magi</u> +daikuni
これほど=GEN	大きい+大根
とても	大きな大根

ある	どうすい	あっちえーんどう	だいくにば	いぼーれーる。
ar-u	tusi	accyee=ndu	daikuni=ba	ib-oor-ee-ru.
ある-PRS	年	おじいさん=NOM. FOC	大根=OBJ. FOC	植える-HON-PRF-PRS
ある	とき	おじいさんが	大根を	お植えになった。

<sup>1</sup> カブは、もともと島にないということで、原文の「大きなかぶ」はここで「大きな大根」と直された。

<u>あまはーる</u>	でーずいぬ	しゆく	<u>あまはーる</u>	だいくに	なり
<u>ama-haa-ru</u>	deezī=nu	syuku	<u>ama-haa-ru</u>	daikuni	nar-i
甘い-ADJ-PRS	大変=GEN	程	甘い-ADJ-PRS	大根	なる-MED
甘い	とても		甘い	大根に	なって

<u>まいへーる</u>	<u>まいへーる</u>	だいくに	なり
<u>mai-hee-ru</u>	<u>mai-hee-ru</u>	daikuni	nar-i
大きい-ADJ-PRS	大きい-ADJ-PRS	大根	なる-MED
大きな	大きな	大根に	なって

<u>あまはーる</u>	<u>ばがーばがいる</u>	かっだがなぬ	<u>まいへーる</u>
<u>ama-haa-ru</u>	<u>bagaa-baga-i-ru</u>	kaddaganaa=nu	<u>mai-hee-ru</u>
甘い-ADJ-PRS	若い-RED-ADJ-PRS	これほど=GEN	大きい-ADJ-PRS
甘くて	みずみずしくて	とっても	大きな

だいくにんどう	でいき	ちよー。
daikuni=ndu	diki	cyoo.
大根=NOM. FOC	できる.PST	HS
大根が	できた	という。

「大きな大根」の最初の一部に、次のような形容詞表現が使われている。まず、「大きい」の意味を表すに、複合形容詞として「マギ」magiが使われ、「ダイクニ」daikuni（大根）に付くことで「マギダイクニ」magi+daikuni（大きな大根）の複合語をなしている。この語幹は、そのままハ形容詞としては使われない。ハ形容詞における「マギ」に相当する語幹は「マイ」maiとなり、ここでは（現在）連体形のmai-hee-ruとして使われている。「マイ」はiで終わっているため、母音調和が起るため接尾辞は「ハ」haではなく「へ」heとして現れる。

「大きな大根」の意味を表すものとして「ウフダイクニ」ufu+daikuniという複合語も話の続きで使われる（以上の一部では使われていない）。この複合語で使われている「ウフ」ufuは、複合形容詞であるが、ハ形容詞や重複形容詞の語幹として使われないようである。ハ形容詞の「ウフホーン」ufu-hoo-nは、同音の語幹ufuからできているが、意味は全く違う「多い」を表し、無関係の語幹である。これらの語幹は、他の琉球諸語でも広く観察される。

「バガバガイル」bagaa-baga-i-ruという重複形容詞も上の書き起こしで観察される。この形容詞の語幹は「バガ」bagaであり、日本語の「若」に相当するが、ここでは「みずみずしい」に近い意味で使われている。同じ語幹が複合形容詞（例：「バガムヌ」baga+munu 若者）やハ形容詞（「バガハーン」baga-haa-n）としても使われる。

以下では、ハ形容詞と重複形容詞の他の活用形や特徴をまとめ、最後に語幹の最後の音による音声的・形態的な特徴をより詳しく説明する。

### 3 ハ形容詞の特徴

形容詞語根に「ハ」ha または「ハー」haa を付けて、活用型形容詞「ハ形容詞」が作られる。例えば、形容詞語根 guma に ha(a) を付けて、guma-ha(a) という形を作ることができる。これに直説法接尾辞（伝統的な概念では「終止形」をなす接尾辞）「ン」-n を付けて、「グマハーン」guma-haa-n（または guma-ha-n）となり、ハ形容詞の原型（いわゆる現在終止形）をなす。

接尾辞「ハ」に伴う母音を以下で長母音として表記するが、実際の発音では長母音・短母音の違いが著者にとって判断しにくい場合があり、おそらくまだ明確でない音韻上の法則や傾向により長母音と短母音の対比が曖昧になる（または、長母音が短母音化する）現象があると思われる。以下では、この曖昧さを無視し、すべてのハ形容詞におけるハ接尾辞を長母音で表記する。

一つの大きな音韻的な特徴として記述しなければならない点は「ハ」接尾辞における母音調和である。「ハ」が付く語根が i または e で終わる場合は「ヘ」he として現れ、語根が u または o で終わる場合は「ホ」ho として現れる。また、中舌母音 i で終わる語幹の場合、「ハ」ではなく「サ」sa が付くことも観察される。

a 語幹	i/e 語幹	u/o 語幹	i 語幹
グマハーン guma-haa-n	カイヘーン kai-hee-n	アウホーン au-hoo-n	スィーサーン sīi-saa-n
小さい	美しい	青い	すっぱい
インシカハーン insika-haa-n	マイヘーン mai-hee-n	ウフホーン ufu-hoo-n	
短い	大きい	多い	

i 語幹における h から s への変化は、調和母音とは別の音韻的現象である。八重山語の他の地域の言葉や琉球諸語を広く考えると、歴史的にはおそらく「サ」の形が古いと思われる。この古い形が i 語幹だけで残っているという見方ができる。また、別の考え方として、中舌母音の音声特徴である s や z に近い摩擦音を伴う特徴から、h から s への音韻変化を共時的な音韻ルールとして考えることもできる。

これまで紹介したハ形容詞の活用形は、接尾辞-haa に「ン」-n または-ru をつけることによって、それぞれが伝統的に「終止形」と「連体形」の活用形をなす。「ン」-n 接尾辞で終わるものを「終止形」として扱う問題点はこれまでの研究で指摘されてきた（例えば、伊豆山 2002）。上のどちらの形も解釈上では「現在」もしくは「非過去」の意味を表すため、「ン」-n と「-ru」を現在・非過去の時制を表す機能を持っているとも考えられる。この 2 つの「現在形」以外に、以下のような活用形も存在する（ここ「ンマハーン」mma-haa-n（美味しい）を例として使っている）：

過去形	否定（現在）形	強調（現在）形
ンマハーダ	ンマハネーヌ	ンマハダル
mma-haa-da	mma-ha-neenu	mma-ha-dar-u
美味しい-ADJ-PST	美味しい-ADJ-NEG-PRS	美味しい-ADJ-FOC-PRS
美味しかった	美味しくない	美味しい

ハ形容詞の否定形を表す接尾辞「ネーヌ」-neenu は、存在動詞「アル」aru の否定形と同じ形である。強いて言えば、この形を「否定現在形」と呼んだ方が正しく、「過去否定形」は存在動詞のと同じく「ネーナーダ」-neenaa-da で表す（例えば、「美味しくなかった」は「ンマハネーナーダ」mma-ha-neenaa-da）。

ここで「強調形」と名付けた活用形は、おそらく焦点助詞「ドゥ」=du が使われるmma-ha=du ar-u から省略されたものであろう。否定形からも強調形からもわかるように、ハ形容詞の活用形は、歴史的には存在動詞「アル」と関係があると思われる。その分析を直接に維持する現象として、以下の様な形も確認できる：

- (1) ヤハ                   アローラヌ？  
ya-ha                   ar-oor-an-u?  
ひもじい-ADJ   ある-HON-NEG-PRS  
ひもじく           ありませんか

ここでは形容詞語幹に「ハ」をつけた形に、「アル」が軽動詞的な働きをして、これに尊敬語を表す接尾辞 -oor- と否定接尾辞 -an と現在接尾辞 -u が付く。このような分析的な表現は基本的にゆっくりで発音されるときだけに現れるようであり、普通の話すときは以下のような形が使われるようである：

- (2) ヤハーローラヌ？  
ya-haar-oor-an-u?  
ひもじい-ADJ-HON-NEG-PRS  
ひもじくありませんか？

ハ形容詞は以上の理由から、少なくとも歴史的には「ハ+アル」から派生されたものと考えられる。

形容詞語幹に「ハ」または「ハー」を付けた形は、そのまま副詞的な表現として使われることがある。例えば、以下の例では「インシカハー」insika-haa（短く）が軽動詞「ナル」と組み合わせて副詞的に使われている：

- (3) インシカハー   ナリドゥル。  
insika-haa       nar-i-du-ru.  
短い-ADJ       なる-PROG-FOC-PRS  
短く               なっている

#### 4 重複形容詞の特徴

ハ形容詞とくらべて、重複形容詞はまだ不明な点が多いため、これからの調査が必要である。ハ形容詞とは違って、重複形容詞は一部の形容詞語幹でしか作れないようである。重複形の有無を予測できる法則があるかは不明である。

形容詞語幹から重複形容詞を作る場合、以上で説明したように一回目の語幹の最後の母音が伸びて長母音として発音される。この他に、二回目の語幹の最初の音節が落ちるものもある。例えば、「短い」の意味を表す形容詞語幹は「インスイカ」insika であり、ハ形では「インスイカハーン」insika-haa-n となるが、重複形では「インスイカースイカイ」insikaa-sika-i となり、最初の「イン」が二回目の語幹から落ちる。こういった音節脱落の法則の解明も、今後の調査が必要である。

最後の問題として、重複形とハ形との間の意味的な違いの問題がある。現時点ではその違いの詳細はまだ不明であるが、すくなくとも言えることは、重複形が「程度が高い」ことを表さないことである。例えば、「ンガ」nga（苦い）から作られる重複形「ンガンガイ」ngaa-nga-i は、「とても苦い」のような意味を表さないようである。ハ形容詞との意味的な違いについては、今後の調査で明確にする必要がる。

最後に、重複形の強調形を簡単に紹介する。ハ形容詞の強調形は上で述べたように語幹に hadaru をつけることによって作られる。これに対して、重複形の強調形を表す接尾辞は duru となる。例えば、「インスイカ」insika（短い）の重複強調形は、「インスイカースイカイドゥル」insikaa-sika-i-duru である。これ以外にも、ハ形容詞と興味深い対照的な活用形をなすことはあるが、今後の研究の課題とする。

#### 5 代表的な形容詞の比較表

上で記述したハ形容詞と重複形容詞の代表的なものを以下でまとめる。語幹の最後の音素による音声特徴をわかりやすくするため、語幹別にまとめた。また、参考のために「石垣方言辞典」に記述されている形も載せた。未確認の形は空にし、話者が存在しないと報告したものは×を付けた。

a 語幹	ハ形	重複形	石垣方言辞典
短い insika	インスイカハーン insika-haa-n	インスイカースイカイ insikaa-sika-i	インツィカサーン incika-saa-n
はやい paya	パヤハーン paya-haa-n	パヤーパヤイ payaa-paya-i	パイシャーン pai-syaa-n
憎たらしい nifa	ニファハーン nifa-haa-n	ニファーニファイ nifaa-nifa-i	ニファサーン nifa-saa-n
苦い nga	ンガハーン nga-haa-n	ンガンガイ ngaa-nga-i	ンガサーン nga-saa-n

甘い ama	アマハーン ama-haa-n	アマーマイ amaa-(a)ma-i	アマサーン ama-saa-n
美味しい mma	ンマハーン mma-haa-n	ンマーマイ mmaa-ma-i	ンマサーン mma-saa-n
しょっぱい sakura	サクラハーン sakura-haa-n	サクラーサクライ sakuraa-sakura-i	サクラサーン sakura-saa-n
狭い iba	イバハーン iba-haa-n	イバーイバイ ibaa-iba-i	イバサーン iba-saa-n
小さい guma	グマハーン guma-haa-n	グマーグマイ gumaa-guma-i	グマサーン guma-saa-n
甘い azīma	アズイマハーン azīma-haa-n		アズイマサーン azīma-saa-n
近い cīka	ツィカハーン cīka-haa-n	×	ツィカサーン cīka-saa-n

u/o 語幹	ハ形	重複形	石垣方言辞典
軽い kar(u o)	カルホーン kar(u o)-hoo-n	カローカロイ karoo-karo-i	カラサーン kara-saa-n
柔らかい fukuru	フクルホーン fukuru-hoo-n	フクローフクロイ fukuroo-fukuro-i	フクルサーン fukuru-saa-n
広い pīsu	ピソホーン pīsu-hoo-n	ピソープィスイ pīsoo-pīsu-i	ピスサーン pīsu-saa-n
強い cyoo	チョーホーン cyoo-hoo-n		ツァサーン cuu-saa-n
遠い too	トホーン too-hoo-n		トゥァサーン tuu-saa-n
低い maaru	マールホーン ma(a)ru-hoo-n		マラサーン mara-saa-n
低い hiku	ヒクホーン hiku-hoo-n		ヒクサーン hiku-saa-n
古い furu	フルホーン furu-hoo-n	×	フルサーン furu-saa-n
遅い fuku	フクホーン fuku-hoo-n	×	フクサーン fuku-saa-n



i/e 語幹	ハ形	重複形	石垣方言辞典
涼しい pirigi	ピリギヘーン pirigi-hee-n	ピリゲーピリゲー pirigee-pirige-e	ピラギシャーン piragi-syaa-n
美しい kai	カイヘーン kai-hee-n		カイシャーン kai-syaa-n
多い takari	タカリヘーン takari-hee-n	×	??

i 語幹	ハ形	重複形	石垣方言辞典
熱い aci	アツアーン ac-caa-n	アツィーツイイ aciī-ciī-i	アツアーン ac-caa-n
酸っぱい sii	スイーサン sii-saa-n	×	スイーサン sii-saa-n

子音語幹	ハ形	重複形	石垣方言辞典
遅い nif	ニッフアーン nif-faa-n	×	ニフサーン / ニッサーン nifu-saa-n / nis-saa-n
重い if	イッフアーン if-faa-n	×	イッサーン is-saa-n
黄色い kīn	??	くいんくいい kīn-kī-i	クインサーン kīn-saa-n

## 参考文献

- 石垣實佳 (2013) 『メーラムニ用語便覧』 南山舎  
 宮良婦人会 (2012) 『宝ぬ島言葉』 宮良婦人会  
 宮城信勇 (2003) 『石垣方言辞典』 沖縄タイムス社  
 伊豆山敦子 (2002) 「琉球・八重山(石垣宮良)方言の文法」『消滅に瀕した方言語法 の緊急調査 研究(1)』 「環太平洋の言語」 成果報告書 A4-004

本論文におけるデータは宮良の方々の協力によるものである。宮良のことばを教えて下さる方々に感謝の意を表す。本論文を完成させるにあたって、多大な協力を頂いた新垣重雄氏に深く感謝申し上げます。データや分析に誤りがあった場合は、著者の責任であるものとする。